

## 「聖霊降臨」

2016年02月15日

**使徒言行録2章1節～4節。**五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

五旬祭の日が来た。五旬祭はギリシア語で「ペンテコステ」と言い、「第五十」という意味である。ユダヤ教の三大祭りの過越祭、七週祭、仮庵祭の中の「七週祭」である。過越祭の安息日の翌日から数え、満7週間を経た翌日の50日目に当たる。七週祭は、小麦の収穫の初穂を神に捧げる祭であった。レビ記23章15節、16節に「あなたたちはこの安息日の翌日、すなわち、初穂を携え奉納物とする日から数え始め、満七週間を経る。七週間を経た翌日まで、五十日を数えたならば、主に新穀の献げ物をささげる」また、出エジプト記34章1節に「あなたは、小麦の収穫の初穂の時に、七週祭を祝いなさい」と規定されている。七週祭は50日目であるから「五旬祭」と言われるようになった。

この五旬祭の日、使徒たちと仲間の者たちが一つになって集まっていた。そこへ、聖霊降臨の出来事が起こった。聖霊降臨において、注目すべき言葉は「風」「炎」「舌」の三つである。風と炎は、旧約聖書では「神顕現」の場で用いられている。風については、エゼキエル書37章に記されている「枯骨の谷」の幻が有名であろう。エゼキエルが霊に導かれ、谷の真ん中に降ろされると、そこには、甚だしく枯れた骨が累々と並んでいた。エゼキエルが、その骨に向かって預言すると、骨はカタカタと組み合い、筋、肉が付き、皮膚が覆った。そして「霊に預言せよ」と命じられ、預言すると、霊が吹き込まれ生き返った。風は人間を生かす息、霊で神の現れを示している。

炎については、モーセがホレブの山で、柴の間で燃え上がっている「炎」を見せられた。柴は火で燃えているのに、燃え尽きなかった。モーセはここで、出エジプトの務めを果たす召命を受けている。また、出エジプト記19章18節には「シナイ山は全山煙に包まれた。主が火の中を山の上に降られたからである」と書かれている。炎、火は神がご自身を啓示される時の現象として描かれている。

使徒たちと仲間の者たちが集まっていると、突然激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現われ、一人ひとりの上に留まった。風、炎は聖霊の神が降った「神顕現」を示している。舌は言葉を象徴していると考えられる。風と炎によって神の聖霊を受けた彼らは、聖霊に押し出され、言葉を語った。聖霊は舌を通して、語るべき言葉を与えたのである。

ローマ帝国の支配下では、コイナーというギリシア語が通用語であった。使徒たちはガリラヤ出身であったのでアラム語を使っていただろうが、「ほかの国々の言葉で話した」という。聖霊の神が降り、他の国々の人々と通じ合う言葉が与えられた。その言葉は、主イエスの福音の真実を語る言葉で、14節以降に、ペトロが代表して説教を語っている。

聖霊降臨日に、神が聖霊において降り「ナザレのイエスは主キリストである」という福音の真実が示され、信仰によって受け入れ、信仰共同体の教会が生まれた。ペンテコステは記念すべき教会の誕生日となった。この日に起きた出来事が今日の教会につながる神の救済史である。聖書の記述はなんとロマンと喜びと希望に満ち溢れていることか。